

2023年1月29日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

申命記 21：22～23

ペトロの手紙一 2：21～25

「わたしたちを解放するため」

(ハイデルベルク信仰問答 問 37～39) ※問答は「日々の祈り」をご覧ください。

### <十字架>

十字架は、わたしたちキリスト教会のシンボルです。わたしたちの教会の屋根にも、銀色の小さな十字架が取り付けられています。

この十字架は、単なるデザインや、記号ではありません。これは本当なら、目にするたびに顔をしかめてしまうような、実に残酷で、むごたらしくて、生々しいものです。

なぜなら十字架とは、罪を犯した人間を、最も苦しめて処刑するための道具だからです。

教会は、「使徒信条」という信仰の箇条で、わたしたちの救い主であるイエスさまが「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」た、と告白しています。

それは、イエスさまが苦しみを受け、十字架につけられたその出来事こそが、わたしたちのための救いの出来事であった、ということを感じているからです。

約 2000 年前に、イエスという名の一人のお方が、罪人としてピラトの許で裁かれ、十字架に架けられ、苦しんで死なれた。そのことによって、わたしたちは救われたのです。

しかし、どうしてそれが、わたしたちの救いとなるのでしょうか。イエスさまの十字架の苦しみと死が、わたしたちと、どのように関係があるのでしょうか。

### <罪を担って>

今日読まれたペトロの手紙一には、まさにそのことがはっきりと語られていました。

2：24 にはこうあります。「そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。」

聖書は、イエスさまが十字架にかかられたのは、自らその身にわたしたちの罪を担うためであった、と告げています。

わたしたちの罪のために、イエスさまが十字架にかかられた。罪人であるわたしたちが、「義によって生きようになるため」。つまり、神さまの御前で「正しい者」とされて生きようになるために。イエスさまが身代わりとなって、わたしたちが受けるべき罪の裁きを受け、有罪判決を受け、その罪のために罰せられ、十字架にかかられたのだ、というのです。

<苦しみを受け>

このことを、『ハイデルベルク信仰問答』の間 37～39 が、「使徒信条」の「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」の解説として、丁寧に語っています。

まず、『ハイデルベルク信仰問答』は、イエスさまが「苦しみを受け」た。このことから、わたしたちが知るべきことを教えようとしています。問 37 にはこうあります。

「問 37 『苦しみを受け』という言葉によって、あなたは何を理解しますか。」

「答 キリストがその地上での御生涯のすべての時、とりわけその終わりにおいて、全人類の罪に対する神の御怒りを体と魂に負われた、ということです。」

まず、ここまでを見たいと思います。

イエス・キリストが「苦しみを受け」られた。まず問 37 は、キリストの苦しみは、「その地上での御生涯のすべての時」にわたるものだった、ということをお教えています。

先週の間答は、「使徒信条」の「主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ」という部分について語られていました。イエスさまのご降誕についてです。

そして「使徒信条」は、その後すぐに、今日の「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ」と続きます。つまり、「使徒信条」は、イエスさまのご降誕について語ったら、その後すぐに、その御生涯の終わりの十字架にまで飛んでしまうのです。

しかし、『ハイデルベルク信仰問答』は、イエスさまが苦しみを受けられたのは、十字架の場面だけではない。この地上にお生まれになってから、十字架の死に至るまで、イエスさまのその御生涯のすべての時が、苦しみに中であつたのだ、と語ります。

まず、イエスさまが神の御子でありながら、まことの人としてお生まれになった。そのことから、苦しみは始まっていました。

神の御子イエスさまは、まことの人となられて、このわたしたちが罪によって陥った、悲惨な現実の只中にやって来られました。イエスさまは、弱ったり、病んだり、痛んだり、疲れたりする肉体をまとわれました。そして、誘惑も、悲しみも、憤りも、味わわれました。また、寒さも、暑さも、貧しさも、眠気も、空腹も、覚えられました。

それは、イエスさまの体も魂も、つまり、イエスさまという全存在そのものが、お生まれになった時から、死に至るまで、罪の悲惨さの中を生きるわたしたち人間と同じように、地上を生きる上での、すべての苦しみの只中に置かれた、ということです。

そして、ハイデルベルクは、それは「全人類の罪に対する神の御怒りを体と魂に負われた」ということなのだ、と語ります。

このイエスさまがお受けになった苦しみは、全人類の罪。わたしたち人間の罪。このわたしの罪。それに対する、神の御怒りを、体と魂に負われたゆえのものだった、ということです。

そして、「とりわけその終わりにおいて」。あの、御生涯の終わりの、十字架の出来事において。イエスさまは苦しみの御生涯の中でも、最も激しい苦しみを、わたしたちの罪に対する神の御怒りとして、その体と魂に負われたのです。

<解放するために>

ではイエスさまは、何のために、わたしたちに向けられた神の御怒りを、ご自分の体と魂に負われたのでしょうか。それが、問 37 の答えの続きです。

「それは、この方が唯一の償いのいけにえとして、御自分の苦しみによって、わたしたちの体と魂とを永遠の刑罰から解放し、わたしたちのために神の恵みと義と永遠の命とを、獲得して下さるためでした。」

本来、神の御怒りは、永遠の刑罰は、究極の苦しみは。神さまに背き、神さまから離れて罪を犯した、わたしたちが受けるべきものでした。

しかし、イエスさまがそれらの苦しみを、ご自分の体と魂に負って下さったことで。わたしたちは、本来、自分が受けるべきであった永遠の刑罰から、体も魂も解放されて、わたしたちの全存在が、神さまの赦しの中に置かれたのだ、というのです。

繰り返しになりますが、イエスさまがお受けになったすべての苦しみは、本来、わたしが受けるべき苦しみだったのです。イエスさまがお受けになった神の御怒り、神の裁きは、本来、わたしが受けるべき御怒り、裁きだったのです。イエスさまがお受けになった永遠の刑罰は、本来、わたしが受けるべき永遠の刑罰だったのです。

しかし、それらをイエスさまが、ご自分の体と魂において、全存在をかけて、全生涯をかけて、わたしたちの代わりに負って下さったというのです。

そうして、わたしたちが負うべき苦しみを、イエスさまが負って苦しまれることで、わたしたちは罪から解放され、永遠の刑罰から解放され、滅びの死から解放されたのです。

そしてイエスさまは更に、わたしたちのために、神の恵みと、義と、永遠の命とを獲得し、それを与えて下さったのです。

このような救いの御業は、まことの神であり、まことの人である、イエスさまにしかお出来にならないことでした。答えのところに、「この方が唯一の償いのいけにえ」と書かれてあった通りです。

わたしたち全人類の罪を担い、すべての苦しみを負うことがお出来になるのは。そして、ご自分の命を犠牲にすることで、わたしたち全人類の罪を償い、罪の赦しと、永遠の命を与えることがお出来になるのは。罪のないまことの人となられた、まことの神であるイエスさましか、おられないのです。

<すべての時>

このように、イエスさまが地上での御生涯のすべての時に、苦しみを受けられたのは。そして、とりわけ終わりにおいて、十字架の死によってご自分を唯一の償いのいけにえとなされたのは。すべて、わたしたちを罪による苦しみから解放するためでした。

しかし、わたしたちは思うかも知れません。それでも、わたしたちにはなお、苦しみがあるのではないか。まだ、わたしたちは罪の悲惨の中にいるのではないか。まだ、わたしたちは、体の痛みや苦しみを抱え、心の弱さや愚かさを抱え、魂の叫びや嘆きを抱え、何かからも解放されていないのではないか。

確かに、わたしたちの目に映る現実、そのように見えるかも知れません。

でもイエスさまは、「その地上での御生涯のすべての時」において苦しみを受け、わたしたちのすべてを担われたのです。

イエスさまは、わたしたちの地上の生涯のすべての時の、すべての苦しみをご存知です。そして、わたしたちの生涯のすべての時を、わたしたちの体と魂の全存在を、イエスさまは、ご自分の体と魂、全存在をかけて、その身に負って下さっているのです。

わたしたちが生まれてから、生きている今、そして死に至るまで。イエスさまがわたしたちのために苦しめなかった時は、ほんの一瞬もありません。イエスさまがわたしたちを担っておられない時は、ほんの一瞬もありません。

イエスさまは、わたしたちが生まれてから死ぬまで、そして死んだ後もなお、全身全霊で担い通して下さるお方です。イエスさまは、それがお出来になるお方です。

ですから、このお方によって、わたしのすべての苦しみは、すでに担われているということ。そしてこのお方が、神の恵みを、罪の赦しを、そして永遠の命を、すでに、確かに、わたしのために獲得して下さっていること。

このことをわたしたちは、今、目の前にあるどのような現実にも関わらず、あの十字架のイエスさまの真実において、信じるようにと、招かれているのです。

まさに、わたしたちが地上の日々の中で呑まれそうになっている、苦しみと罪の悲惨の只中にこそ、わたしたちを担うために、イエスさまが立っておられるのです。

ですからわたしたちは、苦しみの時にこそ、このイエスさまを、しっかり見つめなければならないのです。

今日のペトロの手紙の御言葉には、「そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました」とありました。

わたしたちは、イエスさまが地上に来られて、わたしたちのためにお受けになった傷を、苦しみを、十字架を、真剣に見つめ、受け止めることによって。わたしたちが、どれだけ地上で苦しみながら、傷だらけの歩みをしていたとしても、わたしのすべてがイエスさまに担われている、という確かな慰めを見出すことが出来るのです。わたしのすべてをイエスさまが受け止めて下さっているという、まことのいやしを、いただくことができるのです。

<ポンテオ・ピラトのもとに>

さて、今日の『ハイデルベルク信仰問答』は、この後、「ポンテオ・ピラトのもとに」という言葉と、「十字架につけられ」という言葉に注目します。

イエスさまの苦しみと十字架の意味を、さらに明らかにするためです。

問 38 にはこうありました。「問 38 なぜその方は、裁判官『ポンテオ・ピラトのもとに』苦しみを受けられたのですか。」

「答 それは、罪のないこの方が、この世の裁判官による刑罰をお受けになることによって、わたしたちに下されるはずの神の厳しい審判から、わたしたちを免れさせるためでした。」

「使徒信条」には、「ポンテオ・ピラト」という歴史上の人物名が出てきます。この人は、紀元 26 年から数年間、ローマ帝国の総督として、ユダヤ地方を治めていた人物です。

このように、歴史上の人物の名がはっきりと示されているのは、まずイエスさまの十字架の出来事が、この人間の歴史の中で、確かに起こった出来事である、という証拠です。

イエスさまは、当時ユダヤ地方で最も権力のあった、この総督ピラトの許で裁判を受け、有罪とみなされ、十字架刑に処されることになったのです。

四つの福音書すべてに、この裁判の様子が語られていますが、そこでは、ユダヤ人の指導者たちが、イエスさまを排除したい思いから、一方的に罪に定めたこと。また、当時はローマ帝国の支配下で、ユダヤ人の指導者が勝手に死刑を命じることは出来なかったもので、総督ピラトに訴え出て、イエスさまを死刑にしてほしいと訴えたことが記されています。

ところが、ピラトはこの裁判で、イエスさまに何の罪も見いだせなかったのです。

しかし、そこで民衆が、「イエスを十字架につけろ」と叫び出したので、ピラトは民衆の要求を受け入れ、イエスさまに十字架刑の判決を下したのでした。

ここでは、この世の裁判において、罪のないお方であるイエスさまが、罪人として裁かれ、死刑に処される、という出来事が起こっています。

これは大変に理不尽なことです。神の御子が、罪のない方が、有罪にされ、処刑されるなど、あってはならない出来事です。

しかし、神さまはこのような出来事を通して、すべての罪人を救うためのご計画を、イエスさまにおいて実現なされたのです。

本当は、わたしたちすべての人間が、神さまの御前で、神の審判において、罪人として裁かれなければなりません。そして、すべての者が有罪判決を受け、永遠の刑罰が科せられることは、目に見えていることでした。

しかし神さまは、そのような罪人のわたしたちを、それでも愛して下さったゆえに。憐れんで下さったゆえに。わたしたちが、永遠の刑罰を受けて滅びることを良しとなさらず、この人間の歴史の只中に、「救い主」であるイエスさまを、お遣わし下さったのです。

そして、罪のない人間となられたイエスさまが、ピラトの許で罪人として裁かれることで、わたしたちの罪をすべて、イエスさまが代わりに担わされた、というのです。

このピラトの裁きがなされていた時、実は同時に、人類に罪に対する、神の裁きがなされていた。

そこで、罪のないイエスさまが、わたしたちすべての人間の罪を被り、有罪となられたのです。そして、イエスさまが、本来わたしたちが受けるべき永遠の刑罰を、最も激しい苦しみを、わたしたちの代わりに受けられたのです。

これは、まことに不思議な、神さまの御業です。しかし、神さまはそうにして、わたしたちが受けるべき罪の裁きを、イエスさまに負わせられ、わたしたちが受けるべき永遠の刑罰を、イエスさまの十字架に負わせられ、わたしたちの罪の贖いとなさったのです。

<十字架につけられ>

ここで、イエスさまが処刑された方法が、「十字架につけられ」る、という方法であったことに、また大きな意味があります。

本来、十字架刑というのは、イエスさまがお生まれになったユダヤ社会には、存在しない処刑方法です。十字架刑は、時のローマ帝国でなされていた処刑方法であり、あまりに残酷で、苦痛が長引く、むごたらしい刑なので、ローマ市民には免除される、というほどの極刑でした。つまりこれは、奴隷や、反逆者や、異国の者に課せられる、非人道的な刑なのです。

十字架刑は、極限の苦しみを与えるだけでなく、人々への見せしめであり、また受刑者の尊厳を踏みにじり、辱めを受けさせるものでもありました。

ですから、ユダヤ人にとって、このような、神に逆らう異教の地の処刑方法で、苦しめられて殺される、などということは、大変な侮辱、屈辱、辱めであったのです。

しかも、それだけでなく、ユダヤ人にとって十字架刑には、もっと恐ろしい意味がありました。それは、神に呪われた死である、ということです。

このことは、ユダヤ人の律法に定められていました。今日読まれた申命記の 21：22～23 です。「ある人が死刑に当たる罪を犯して処刑され、あなたがその人を木にかけるならば、死体を木にかけたまま夜を過ごすことなく、必ずその日のうちに埋めねばならない。木にかけられた者は、神に呪われたものだからである。あなたは、あなたの神、主が嗣業として与えられる土地を汚してはならない。」

「木にかけられた者は、神に呪われたものだからである」。つまり、十字架の木に架けられて死ぬということは、神に呪われて死ぬ、神に見放され、捨てられ、関係を切り離されて、本当の意味で死ぬ、ということの意味していたのです。

それはまさに、神さまに罪を犯した者の、まことの死。神さまに背き、逆らい、神さまとの関係を破壊したものが辿らなければならない末路でした。罪人であるわたしたちが受けなければならない、永遠の刑罰こそ、神の呪われて死ぬ、ということでした。

しかし、イエスさまが、わたしたちの代わりに裁かれ、わたしたちの罪を負い、まさに十字架の木に架けられて死ぬことによって。この、わたしたちが受けるべき神の呪いを、すべてご自分の身に引き受けて下さった、というのです。

『ハイデルベルク信仰問答』の間 39 はこのような問答でした。「問 39 その方が『十字架につけられ』たことには、何か別の死に方をする以上の意味があるのですか。」

「答 あります。それによって、わたしは、この方がわたしの上にかかっていた呪いを、ご自身の上に引き受けて下さったことを、確信するのです。なぜなら、十字架の死は神に呪われたものだからです。」

イエスさまは、わたしたちのために、あの、神に呪われた十字架によって死なれたのです。

まさに、そのことによって。わたしたちは、もはや自分が、イエスさまにあって、神の呪いを受けることは永遠にない。そう、確信して良いのです。神さまから離されることは、永遠にないのです。神さまと関係を断たれることは、永遠にないのです。イエスさまが、あの十字架によって、その呪いをすべて担って下さったからです。

わたしたちキリスト者は、あの残酷な、非道な、処刑道具である十字架を見つめる時、そこに、本来はわたしが受けるべきであった神の怒りと、裁きと、呪いを見つめます。

しかし、その十字架につけられたのは、わたしではなく、まことの神であり、まことの人となられた、イエスさまでした。この十字架につけられたイエスさまにこそ、わたしたちの赦しがあり、命があり、救いがあるのです。

#### 【お祈り】

天の父なる神さま

神さまに逆らったわたしたちの罪を、そのゆえの罰を、呪いを、神の御子が身代わりになり、すべてを引き受けて十字架に架かって下さるとは、一体どのようなことなのでしょう。

罪人であるわたしたちのために、イエスさまが、御生涯のすべての時において苦しみを受けて下さったとは、なんという驚くべき救いでしょうか。

神さまがなされる救いの御業に、驚きをもって、畏れをもって、心から感謝いたします。

どうか、わたしたち一人一人が、イエスさまの十字架によって与えられた救いを、確かに受け取ることが出来ますように。

そして、わたしたちはこの恵みに、どのようにお応えすればよいか分かりませんが、あなたに喜ばれる心からの礼拝をささげ、御名をほめたたえつつ、御言葉に従っていくことが出来ますように、お導き下さい。

このお祈りを、わたしたちの救い主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン